

謹賀新年あけましておめでとうございます。

おかげさまで、今年で無茶々園は 47 年目の春を迎えることができました。これも皆様方のおかげです。ありがとうございます。「新型コロナウィルス感染症」はやっと終息したかと思いましたがオミクロン株が拡大しつつあり、ウィルスとの共生はまだまだ続くようで上手につき合いたいものです。

昨年は、東京オリンピック・パラリンピックが賛否両論はありながらも開催され多くの感動と勇気を与えてくれました。また行動制限される中、1年8か月ぶりに東京へも出張することができました。一歩踏み出すことがそろそろ必要になってきたのかなと思います。徐々にではありますが、日常を取り戻し早くリアルな交流がしたいと願っています。



昨年はオンライン交流会が主流となった一方で 市内の小中学校の農業体験などが増えました。

さて、コロナ禍の 2 年間で、私たちの実践してきた産直という事業や運動が社会の一つのモデルとなったと実感しています。持続可能な地域社会へ(環境省の地域環境共生圏)、環境負荷を伴わない農林水産業へ(農水省のみどりの食糧システム戦略)、厚労省の社会保障も自助、共助、公助の組み合せへと転換しています。これは無茶々園の里のまちづくりがモデル化、社会化するということだと思います。

詳しく言うとすれば、一つ目として、持続可能な地域社会を創造 すること、これまでにも増して環境にやさしい農業を目指す(カー ボンニュートラル・農薬総量削減など)ことです。農水省のみどりの食糧システム戦略は持続可能な農業、環境負荷を与えない農業への転換、特に有機農業を2050年に全耕作面積の4分の1を目標にすることや持続可能な肥料(海外依存からの脱却)や、環境負荷を低減できる農業に対する価値の位置づけが明記されています。戦後の商業的単一化した儲かる農業戦略からの歴史的な方針転換だと言えます。無茶々園47年の活動そのものがモデルとして認められたといって過言ではありません。

さらに、二つ目として 2020 年 12 月に、労働者協同組合法が成立され、働き方や暮らし方、コミュニティの在り方も「協同労働」という運営に転換されるでしょう。コロナ禍で医療・介護従事者などエッセンシャルワーカーの重要性も再認識されました。暮らしを支えるワーカーがいなければ安心安全な生活はできないということです。

そして三つ目は、環境省の地域環境共生圏構想は無茶々園が都市生活者(消費者)の皆さんと培ってきた産直運動そのものを意味するものであると思うからです。価値ある消費(エシカル消費)です。ふるさと納税もその一つでしょう。消費することで社会がよくなる、役に立っているそんな購買活動です。うれしいことに、Z世代・ミレニアル世代の若者たちにも徐々に広がっているそうです。私が提唱しているコミュニティ産直(都市と田舎の地域づく



昨年はわけありみかんをご購入くださりありがとうございました。

り交流&事業)にも是非参画してほしいと願っています。

無茶々園の取り組みが「世の中のモデルと言われるようになった」という事だと勝手に思っています。無茶々園の理念に「エコロジカルライフを目指す運動体」とあります。ひとりひとりの多様性を認め合いながら暮らしを楽しむ、自分らしい暮らし方をすることこそがコロナ後の目指すべき道なのではないでしょうか。斎藤幸平氏著「人新生の資本論」の中にあるように気候危機をとめ、脱成長しながらも生活が豊かになり(お金ではない)、余暇が増え、格差もなくなる、そんな社会が可能だとしたら本当にいいなと思っています。

さて、無茶々の里は昨年もいろいろありました。みかん山では、 カメムシの大量発生の影響で多くの有機の温州みかんは落果する か、ジュース原料になるほかありませんでした。一方、無事収穫 できたものは秋晴れ続きで糖度が高くおいしいみかんをお届けす ることができました。



福祉事業は、学童保育、リハビリ特化型のデイサービス、訪問介護サービス、介護タクシー事業も順調に進んでおり、来春からは事業継承として、グループホームの運営にも挑戦していく予定です。福祉で働く仲間も80人、グループ全体で職員140人、関係する生産者176名になる見込みです。働く仲間が増え、地域の必要とされる困りごとを事業化し、無茶々の里のまちづくりが一歩一歩ではありますが進んでいます。

令和 4 年、無茶々園は設立 50 年に向かって無茶々園の 2030 年ビジョンを完成させます。目指すところは、FEC 自給圏構想、エコロジカルな町づくりと変わりませんが、次世代のリーダーたちに託したいと思います。

想像してみてください。この西予市明浜町の 2030 年の姿を!時間がゆっくり進み、だれもがのんびり生活している。ロボットや海外の人達もいっしょに生活している。リアルとバーチャルが共存し、人々の暮らしを豊かにしている。妥当な経済、妥当な賃金、妥当な暮らしが実現されている。これこそが、農水省や環境省が掲げている姿そのものと言えるのです。そんな社会を実現するためにも、多くの方たち(都市生活者や世界の人々)と「共感」し、つながることで少しずつ世の中が変わっていく。「気候危機」は待ってはくれません。今からやれる取り組みから始めましょう。そして共感の大きな輪でもって、「ワン・チーム」になれば思いは成就するはずです。共に努力しましょう。

無茶々園はこれからも「10年、20年後の未来の子どもたちのために、 小さな多くの種まきをし、日本一の町づくり集団を目指します」 どうか、皆様もこの田舎再生運動に参画して頂き、活力ある日本 にしましょう。 地域法人無茶々園 大津清次

失敗はどろの中に入るまで続くのか。

寒中の折、皆様におかれましてはお達者でお過ごしのことと思います。このたびは、我が「ポコロコ農園」(齊藤達文の農園愛称)における栽培管理の失敗かつ高温時の不適切な農薬散布等で果皮にこれでもかというぐらい外観的ダメージをこうむりました。ホントに「何十年みかん作りをやってきたんぞ」と自らのざぁっとまくれなやり方に情けなくなってしまいます。それに対して自然は容赦なく、反発が現れます。

このような不出来なみかん達を、無茶々園事務局が「なんとか頑張って売るけん」と言ってくれて「わけありみかん」と称して骨身を削って箱詰めしてくれました。こんな次元の低い訳ありみかんをどうやって売り込んだのか、心苦しい限りです。その上にお金を出して食べて下さった皆様の心配りとご支援に深く深くお礼と感謝を申し上げます。また、皆様からの温かい励ましのお便りやメッセージを受け取り、胸にひしひしと熱いものがこみ上げてきます。

百姓を始めて半世紀近くなりますが、農産物はイノチのあるものであり、食べてくれる人達との心の交流である、そのようなことばを今改めて思い起こしています。今一度、大地に根ざし、みかん畑に寄り添う百姓にならんといけんなと身にしみている所です。植物は死して土を肥やし還元する。私も失敗のタネを土の中にもっていくんぢゃなく少しは後世の為に肥やしにならなければと思います。

そろそろ私の頭の中は白骨化していくのがわかってくる年代になっていますが、皆様からの心温まる気持ちが脳内を潤ませ、細胞が活性化してくるのがわかります。まだまだ頑張らにゃと気を引きしめています。

最後になりましたが、皆様からの大いなるご厚情とご支援に心より感謝申し上げます。トラ年がいい景色の見える年になりますよう祈っています。 齊藤 達文



佐藤真珠より新年のご挨拶。

あけましておめでとうございます。この原稿を書いているのが年末、1年があっという間で気が付けば年の瀬です。2021年を振り返ります。本業の真珠養殖ですが、3年前から続いているアコヤ貝の大量へい死が続いています。この状況を変えようと、新しい取り組みを始めました。稚貝の試験養殖です。アコヤ貝がふ化して1年目の稚貝の段階で高水温に弱いということから、愛媛では最北で水温の低い、この明浜の海で春から夏の間だけ養殖しました。わずか数ミリの稚貝から育て、段階的に小分けしながら、ネットの網目も変えます。真珠養殖とは異なることばかりで苦労の連続でしたが、結果は南の海域より高い生存率となりました。しかし、最後にまさかのワタリガニの襲来を受け、残った貝の3割以上が食べられるという不測の事態に。知り合いの漁師曰く、タコが少なくて、餌となるカニが多かったということですが、自然の力に完敗です。プラス思考で、次に繋がる結果を残せたことに満足したいです。

次に青のりです。本格的に稼働した1年でしたが、5月に6水槽が全滅しました。適温で日照時間も長くなる春、青のりが最も育つ季節に、成長が早すぎて途中で伸びきってしまい、最後の水槽で縮れて廃棄処分になりました。胞子培養からの3か月間が全て無駄になり泣きそうになりましたが、データを再検証し、各水槽での栽培日数や青のりの個数などを調整することで以降の栽培は順調に進みました。今では安定した品質を保っていますが、すっかり青のりの成長に合わせた生活スタイルです。



真珠に青のり。共通項は明浜の豊かな海です。



佐藤直珠のバイタリティーを支える家族。

そして、家族の話題。末っ子の三男が、長女、次男と同じ保育園に通い始めました。長男が小学 4 年なので、平日の朝は時間との戦いです。青のり収穫日は、朝 4 時半には準備に出て 6 時にいったん帰宅。妻は保育士で共働きなのですが、二人で手分けして朝食や子どもらの支度に追われます。やっと送り出し、仕事に戻った時には半日分くらい疲れ、そのまま気忙しく一日が過ぎます。それから夜になり、布団を並べ家族 6 人が川 ×2 の字になって子どもらと添い寝するのですが、この時ばかりは心が穏やかになります。漫然と一日を過ごしていたら、この一時の大切さ、貴重さには気が付かなったかもしれません。こんな小さな幸せが積み重なって、あとで振り返って幸福な人生だったと思えればいいかなと。

最後になりましたが、今年から海の生産者に仲間が増えました。 漁師の川原さんです。私や祇園丸の哲三郎より年上で、雅量に富 んだ兄貴分です。皆で力を合わせて、よい仕事をしていきます。 本年もどうぞよろしくお願いします。

佐藤真珠 佐藤和文

新年より新しく仲間に加わる川原さん。1月から川原さんが釣り上げ、加工まで一貫管理した切り身と祇園丸の釜揚げちりめんを組み合わせた「海産物セット」を販売いたします! 詳しくは同封のチラシをご覧ください。



次世代へ。



無茶々園の活動の中心となっている明浜町は東西に長く、東から

俵津、渡江、狩浜、高山、宮之浦、田之浜の6つの集落があります。 その中でも西端に位置する田之浜地区の畑をてんぽ印が借り受け ることになりました。田之浜でも「山の奥の山の上にある」この 畑は40年ほど前、生産者・中山源綱さんが開墾しました。昔はサ ツマイモを育てていましたが当時は荒れており、草木を刈り取り 苗木を植え、潅水設備に至るまで自分で整備したという、まさに 中山さんが一から育て上げた畑です。

中山さんは家族の病気をきっかけに引退を決意。「もともと数年後には引退しようと思っとったけど、人生は設計どおりにいかんかった」のですが、引退を決めてからは方々に話をし、同地区の生産者やてんぽ印に畑を任せる道筋を立てました。無茶々園の生産者として活躍すること 40 年余り。農業は重労働。収穫期は力がいる

無茶々園で待ています。

この冬は多くの大学生の方が農業研修に参加し収穫を手伝ってくれました。海外実習生の入国がままならず人手不足が顕著だった 今期。本当に助かりました。その中の 1 人、鈴木清花さんの感想 を紹ご紹介します。

大きいザックを背負って愛媛に初上陸し、野福トンネルを抜けた 先に広がる段畑と海の絶景に目を奪われてから約 10 日間、毎日が 濃く、本当にあっという間でした。ホームページやパンフレット などで明浜の光景は何度か目にしていましたが、いざ実際目にし た時の感動は衝撃的でした。湖のように穏やかなキラキラした海 と、山の下から上まで続く段畑にオレンジに色づき始めているみ かんの樹。その壮大な光景は、どこかの国の遺跡のようで、日本 にもこんなところがあるのかと目に焼き付いています。



作業は主に温州みかんや柚子の収穫でした。私はこれまで農業実習の経験はあったのですが、柑橘類の作業は初めてだったので、たくさんの気づきがあり、とても新鮮で楽しかったです。特に柚子の枝にはするどいトゲがあり分厚い軍手で収穫したり、収穫したみかんを運ぶモノラックは小さなジェットコースターみたいだったりと、初めて知ること、見ることが多く、実習中常にワクワクしていました。最初は、大きな樹に無数についたみかん、しかもそれが段畑一面に広がった光景をみて、これを1つ1つ手作業で収穫すると知った時はかなり途方もない気持ちになりました。がしかし、作業を始めてみると、みんなとお話しながら、1本すべ

て取り終わった時の達成感を味わいながら、ハサミでばちぱちみかんをとっていると、意外とどんどん進みました。そしてなんといっても、目の前に広がる海を眺めながら、波の音を聞きながら、農作業をすることはなかなかないので、海も山も好きな私にとっては最高の環境でした。

実習中、海の生産者さん(ちりめん、真珠、青のり)にお話を聞く機会もあり、海と山は密接に関係していることや、自然相手に一次産業で働く人々の強さを身に染みて実感いたしました。いろいろな方からのお話を通して、基盤になっているのは地域の人々の繋がりや思い、あたたかさであり、都会では感じられない大切なことが、ここの地域にはつまっていると感じました。この 10 日間を通して、"どう働くか、何を成し遂げるか"にとらわれすぎず、"どう生きたいか、どんな暮らしがしたいのか"を考える機会になりました。そして無茶々園で働かれている方々の生き生きとした姿に憧れました。今回学んだことを忘れずに、私もかっこいい百姓になれるよう精進いたします。

最後に見ず知らずの私をあたたかく迎えてくださった無茶々園の 皆様、地域の皆様をはじめとする、お世話になりました全ての方 にこの場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうござ いました。



農業研修は私たちの目指す「都市との交流」の入り口の1つ。こちらこそ、鈴木さんをはじめ来ていただいた皆さんへ感謝の気持ちでいっぱいです。3月上旬には地域づくり団体「かりとりもさくの会」と共同で計画したフリーワークスペースも無茶々園事務所のある、旧狩江小学校内に完成予定です。農業研修以外のつながりが生まれるかもしれません。詳細はまたご報告いたしますが皆さんもぜひ無茶々の里に来てくださいね。

ものの成果がわかるが、夏場の草刈り(特に幼木園)は大変で「(除草剤を使う) 一般栽培の畑がうらやましかったこともあった」と苦笑い。それでも無茶々園の生産者を続けてきた理由は消費者の皆さんとの交流があったからです。

生まれも育ちも田之浜の中山さんにとって自分のみかんは「この 味しか知らないから普通のみかん」。そのみかんをわざわざ購入し てくれること、はがきなどを通じて届く消費者の生の声が農業へ の気持ちを支えてきたと言います。

今後は農家にも定年を作り、畑を継承する時期を明確にしてもいいのではと中山さんは考えています。農業はやりがいのある職業ですが、経済的に安定しなければ続けていくことは難しく、加えて果樹栽培は植えて一年で収入に直結するものではありません。

収穫が見込める畑を作り、価値ある園地として若手に譲ってこそ 後継者ができ、集落の継続につながっていきます。

中山さんの畑を樹の仕立て方、獣害対策にいたるまで「愛を感じる畑」と表現したのは引き継いだてんぽ印の村上さん。この畑を 価値ある畑として次の世代につなげることが、無茶々園の創成期 を支えた生産者への恩返しであり、役割だと信じています。

